

日本で働いた台湾人の滞在前から帰国後までの過程における共通点—複線経路・等至性アプローチ (TEA) からの考察—

久保田佐和子

1.はじめに

厚生労働省の『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和元年10月末現在）』¹によると、日本で働く外国人労働者数は、増加の一途をたどっている。2019年10月に過去最高の約166万人に達した。日本語学習の最終到達点が日本での就労とは限らないが、大学で日本語を学んでいる学習者が在学中に実習へ行ったり、卒業後日本で働いたり、日本での労働が依然より身近に感じたと感じている。近年では、台湾では高等教育機関での日本語学習を終了したあと、日本へ行って就職するというのが学生たちの進路の一つとなっている。その背景には、外国人労働者数を増やしたい日本政府の方針が追い風となっていることもあり、コロナ終焉後も日本へ行って働く台湾からの外国人労働者が引き続き増加することが予測できる。

台湾の高等教育機関において日本語教育に携わるものとして日本語学習者の「日本語習得」に終わりはないと感じている。実際に日本で働いた台湾人が日本でどのようなカルチャーギャップや困難にぶつかり、どのような過程を通じて乗り越え、また乗り越えられず、挫折したするのかが気になった。そこで、日本で働いたことがある台湾人4名へインタビューを行い、彼らが日本で働き、そして日本から帰るまでの経路を Trajectory Equifinality Approach (TEA) を用い、インタビューの内容の分析をする。

本調査は、タイプの異なるインタビュー対象者から日本の滞在前

1 厚生労働省が、令和元年（2019年）10月末現在の『外国人雇用についての届出状況』を取りまとめたものであり、その時点で事業主から提出のあった届出件数を集計したものとある。また、事業主からの届け出は2018年から義務化されている。その時点では、COVID-19の影響はないと考えられる。

から帰台後の長きに渡る期間のライフストーリーを聞き、TEA を用い共通点を探り、分析し、考察を加える。そこから、日本で働いた台湾からの外国人労働者の行動や思考のパターンの共通点を見つけることを一つ目の目的とする。また、彼らが日本で共通に経験したことを通じて、日本が台湾からの外国人労働者を受け入れるにあたっての問題点や課題点を挙げ、それらの解決案などを提示することを二つ目の目的とする。

日本における台湾外国人労働者について調べた調査は少ないため、本稿の結果は、今後日本で働きたいと考えている台湾人の一助となるだろう。また、日本で遭遇する問題が同様であるならば、増え続ける外国人労働者との多文化共生を目指す日本に向けて、台湾人と共生するための提言が可能となると考えている。

2. 先行研究

2.1. 日本にいる外国人労働者

厚生労働省の『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和元年 10 月末現在）』²によると、日本で働く外国人労働者数は、増加の一途をたどっている。2019 年 10 月に過去最高の約 166 万人に達した。

² 厚生労働省が、令和元年（2019 年）10 月末現在の『外国人雇用についての届出状況』を取りまとめたものであり、その時点で事業主から提出のあった届出件数を集計したものとある。また、事業主からの届け出は 2018 年から義務化されている。その時点では、COVID-19 の影響はないと考えられる。

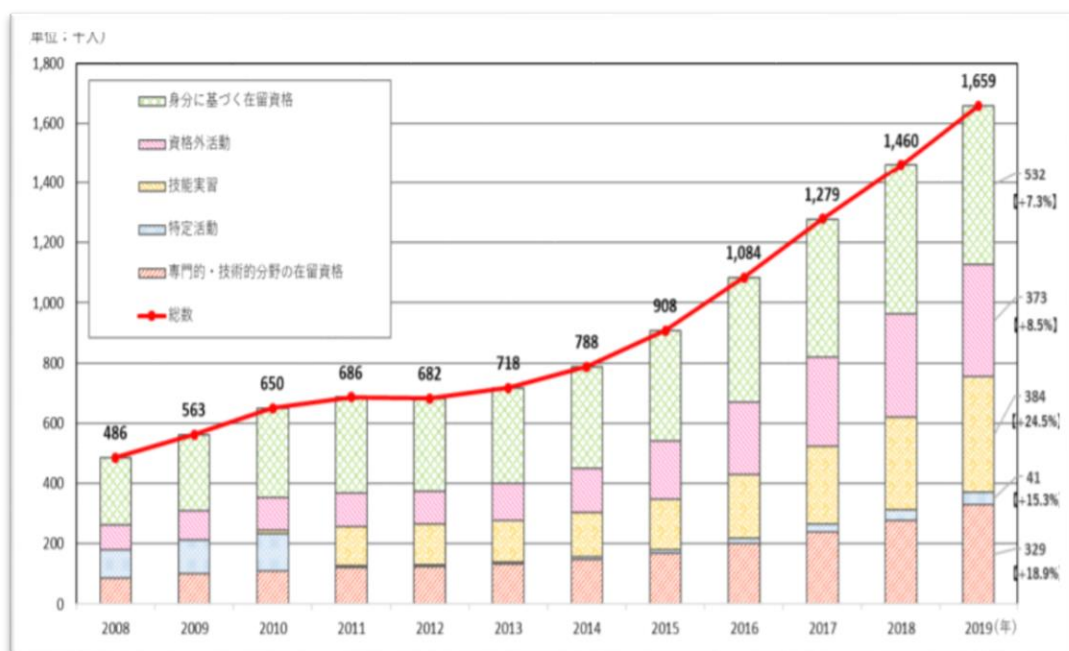


図1 日本在留資格別外国人労働者の推移³

外国人労働者を国籍別にみると、2018年同期比84,486人増で大幅増加し、全体の24.2%にあたるベトナム人労働者などに比べると勢いはないが、前年同期比29,210人増418,327人で、全体の25.2%を占め、依然として一番多いのは、中国人労働者となっている。その中には日本語学習者数が多い台湾からの労働者も多く含まれるだろうから、日本で働いている台湾人も増加しているだろうことが推測できる。

2.2. 複数経路等至性アプローチ (TEA) について

安田他 (2015) によると、TEA (Trajectory Equifinality Approach) とは、複線経路等至性アプローチと訳され、時間を捨象せずに人生の理解を可能とする文化心理学の新しいアプローチ方法である。また、構造 (ストラクチャー) ではなく、過程 (プロセス) を理解しようとするもので、質的な多様性を表現することを可能とした。

³ 『外国人雇用についての届出状況 (令和元年10月末現在)』より「在留資格別外国人労働者の推移」のグラフを抜粋。

横軸は、人間の成長を時間的変化を非可逆的時間として捉え、たとえ対象者の時間の長さが異なっても一つの軸で表現する。また縦軸は、「社会的○○」「社会的○○」という文化社会的文脈との関係の中で捉える。複数人に質的インタビューをし、その過程から誰もが必ず到達する「等至性」という共通点を示したり、複数経路からなる「分岐点」を TEM 図により表現するアプローチ方法である。

TEA の用語①

等至点 (Equifinality Point. EFP)

多様な経験の経路がいったん収束する地点

分岐点 (Bifurcation Point. BFP)

ある選択によって各々の行為が多様に分かれていく地点

必須通過点 (Obligatory Passage Point. OPP)

論理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるをえない地点

非可逆的時間

人間が時間と共にあることを表す概念

社会的方向づけ

社会的諸力によって、選択肢が狭められる場合、そこには力が働いていると考える。

このように、TEA は時間の流れとシステムをとらえるという特徴をもった、過程と発生を捉える新しい質的研究法として広まってきた。TEA を用いた研究は、医療看護系から適用され、社会心理学の分野から発展し、外国語教育へ応用されてきた。

日本語教育では、柴田 (2018) に「日本語学習における関西弁創作の教育効果—複線経路・等至性モデリング分析から見る留学生 4 名の変容過程から」の中で、

また、内山 (2018) は、「台湾における成人日本語学習者の学習継続プロセス—教室への参加及び参加継続の促進・阻害要因の分析—」として、また台湾では、服部 (2000) 「」

複数(4名)の被験者が日本で働いている期間を含めて、日本で働く前から、台湾への帰国後までという長い過程を調査する。

TEM(Trajectory Equifinality Model)

(被験者から)聞いた「等至点に至るまでの経過」を、TEAに関する概念ツールを使って経路を描くのがTEM図となる。

TEA 研究会 <https://sites.google.com/site/kokorotem/home?authuser=0>

本調査における非可逆的時間を示す時間軸

TEM図の横軸は、非可逆的時間を示す時間軸である。

本調査では、日本滞在期間においても3年から11年という実際とは異なる各被験者の時間を、TAE図として同じ軸の中で表現する。

多様なプロセスを歩んだ被験者4名の日本滞在前から台湾への帰国後までの過程における人生の径路が全員が到達する「等至点」、大部分の人が必須で通過する「通過点」、分岐したりする「分岐点」を明らかにして、複線経路で示す。

3. 調査概要

本調査の調査目的、調査対象者、調査方法を下記に示す。

3.1. 調査目的

本調査は、タイプの異なるインタビュー対象者から日本の滞在前から帰台後の長きに渡る期間のライフストーリーを聞き、TEAを用い共通点を探り、分析し、考察を加える。そのことから、日本で働いた台湾からの外国人労働者の行動や思考のパターンの共通点を見つけることを一つ目の目的とする。また、彼らが日本で共通に経験したことを通じて、日本が台湾からの外国人労働者を受け入れるにあたっての問題点や課題点などを挙げ、それらの解決案などを提示することを二つ目の目的とする。

3.2 調査方法

TEAの共通点を見つけるという特徴を生かすため、タイプの異なるインタビュー対象者4名を選定する。TAEで提示されている

一般的なインタビューする人数の設定は、1名、4名、9名とされているため、本調査では4名を採用した。ここでタイプの異なるというのは、性別や年齢、日本語学習歴や日本で働いた職種や、働いた場所などができるだけ偏らないように注意した。さらに、日本で働いたときの雇用形態が実習やワーキングホリデーを含まない、無期雇用の正社員であること、また台湾へ戻った理由が COVID-19 が直接の原因ではないことも条件とした。

インタビューの回数は、1人に対して1、2回行い、時間は1時間から3時間ぐらいとした。つまり、インタビュー対象者の時間に合わせて、1人少なくとも2時間は行うこととした。また、あとから聞きたいことなどがあれば、SNSを利用して追加質問したり、不明瞭なところを再確認したりした。インタビューは基本的に日本語で行い、わからないところがあれば、中国語で言ってもらったり、インターネットで単語を調べたりしながら進め、リラックスしてインタビューに受け答えしてもらうように努めた。

インタビューの内容は半構造的インタビューを採用し、日本に行く前から台湾に戻ったあとの期間を設定し、対象者のその期間のライフストーリー⁴を聞いた。表3にインタビュー内容を記すが、ライフストーリーというインタビューの形式上、好奇心に従い質問するため、それだけの話題にとどまらないこともあった。また、分析方法については、複線経路・等至性アプローチ (TEA) を使用した。

表3 インタビューの内容

1. インタビュー対象者の基本情報

⁴ 大久保 (2008) によると、「ライフストーリー」とは、語り手の「人生の物語」を聞くという質的調査で使われるインタビュー方法である。語り手のこれまでの人生に全体に及ぶ「ライフヒストリー (生活史)」と比べて、人生のある時期の一つのエピソードが単独で語られている場合も含まれる。また、ライフヒストリーが静かな聞き手に徹するのに対し、ライフストーリーは、聞き手が共同制作的な役割を持ち、好奇心を持って語り手に詳しく尋ねることが必要となる。

2. 日本語習得歴
3. 職歴
4. 日本で正規雇用の社員として働いた期間や仕事内容など
5. 日本で働き始めたきっかけ
6. その期間にあった困難なこと（カルチャーギャップや仕事のやり方の違いや人間関係など）
7. 台湾へ戻ることにした理由
8. 台湾に帰ってからの生活や仕事
9. 今から振り返って日本で働いたことについて

3.3 インタビューの被験者の選定基準

4名を選定。←TEAで提示されている基準人数 1/4/9
なるべくタイプの異なる被験者を選定

3.3 インタビュアーの詳細.

下記にインタビューイー4名の詳細を記す。

	A	B	C	D
性別	女性	女性	男性	男性
年齢(インタビューした時点 2020年4月～9月)	20代後半	50代前半	40代後半	30代前半
最終学歴	学士	準学士	準学士	学士
日本語専攻か否か	日本語専攻	日本語専攻以外 会計専攻	日本語専攻以外 機械専攻	日本語専攻
日本で働いた場所(職種)	・沖縄県(ホテル業) ・神奈川県(商社のバイヤー)	・宮城県(ホテル業)	・東京都(台湾のテレビ局のカメラマン/専門技術職) ・山梨県(ホテルのカメラマン)	・沖縄県(レンタルカー/サービス業)

日本で働いた期間(合計年数)	約 3 年(1 社目 1 年半、2 社目 1 年半)	約 5 年	約 11 年(1 社目 10 年、2 社目 1 年)	約 4 年
----------------	----------------------------	-------	----------------------------	-------

本調査における TEM 図の時間区分を、調査した時間軸に従い、被験者が日本で働く前の「第一期 日本語学習を始める」、日本で働いている「第二期 日本で働く」、そして、台湾へ帰ることを考え始めた「第三期 帰国を考え始める」、そして帰台及びその後の「第四期 帰台後」に分けた。

1. 結果と考察

TEM 図の時間区分ごとに、4 名のインタビューイーのたどって来た軌跡を示し、結果を考察する。

4.1 「第一期 日本語学習を始める」の結果と考察

日本で働くためには、日本語を使用する必要があるだろう。そのため、日本で働く前の時間区分として「第一期 日本語学習を始める」を作成した。日本で働くためには、どの程度の日本語が必要なのだろうか。また、日本で働いているときの日本語習得はどのように行っていたのかを知りたいと考えた。そこで、インタビューイー 4 名の日本就業前と後の日本語習得歴について調査した。また、「年齢 (期間)」は、日本就業前の日本語習得期間となる。日本語教育機関で日本語を学習するだけが日本語習得とは限らないためここでは、「日本語習得」と表現した。詳細を表 2 に示す。

対象者	A さん	B さん	C さん	D さん
年齢 (期間)	15 歳～22 歳 (7 年)	20 歳～37 歳 (15 年)	28 歳 (1 か月)	18 歳～28 歳 (10 年)
日本語を学習し始めたきっかけ	外国語を勉強したくて、W 大学の 5 専部へ入学。英語学科に行けずに、日本語を専攻。	姉 2 名がアメリカに留学中だった。日本留学のほうが、費用が安かったため。	会社から突然日本への転勤を命じられたため。	語学に興味があった。英語がある程度できたため、大学で日本語を専攻。

日本就業前の日本語習得歴	<ul style="list-style-type: none"> ・5 専部、2 技を通じて、7 年間継続して日本語を勉強した。 ・1 学期の日本へ交換留学中、22 歳のときに「旧日本語能力試験 1 級」に合格した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪の日本語学校に入り、バイトと学校を通じて、2 年で「旧日本語能力試験 1 級」に合格。 ・台北の日本専門旅行会社で日本語を生かして働いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本へ行く前の準備時間は 1 か月だけだったので、独学で 50 音と簡単な挨拶を勉強した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学 3 年生のときに「旧日本語能力試験 2 級」に合格 ・卒業後、台湾の高雄にある日系企業に就職し、日本人の上司に毎日叱られながら、日本語が上達。半年で、「旧日本語能力試験 1 級」に合格。 ・30 歳前に、ワーキングホリデーで日本へ行き、アルバイトや遊びを通して、日本語を習得。 。日本で日本人の彼女ができていつも日本語でコミュニケーションをとるようになった。 ・ホテルフロントのアルバイトで敬語を厳しく教え込まれた。
日本へ行ってからの日本語習得歴			<ul style="list-style-type: none"> ・日本へ行ってから午前中は 1 年間日本語学校へ行く。「旧日本語能力試験 3 級」に合格。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事を通じて日本語を勉強した。 ・好きな映画を何度もみてセリフを覚えてしまった。

C を除く 3 名は、日本で働くことを強く意識して日本語学習を始めたわけではないが、日本就業前に日本語教育機関で日本語を勉強し、7 年～15 年という長い日本語習得期間を経ている。そして、事前に「旧日本語能力試験 1 級」に事前に合格していることを共通点としている。つまり、日本被験者の多くは、高い語学力が日本で働く前からあった。

事前の日本語習得は、日本語教育機関だけに限らず、仕事場でも継続されていた。Bにとっては、それが日本でのアルバイトをしたことだったり、台湾の会社で日本語を使用して働いたりしたことだった。Dによると、自信の日本語が上手になったのは、日本語教育機関での学習より、台湾で日系会社に入り上司に毎日怒られたことが大きかったと苦しかった思い出を何度も振り返っている。日本に行く前から、日本語を使って働いた経験がある人が2人いた。一方、AとCは一度もなかった。

日本で働いてからの日本語習得についても質問を試みたが、共通しているのは、旧日本語能力1級を持っていても同様に職場での日本語に苦労していることであった。Cは50音しかできなかったのため、ラーメンの食券を買うのさえ苦労したとのことであった。しかし、インタビューイーは仕事場で日本語を使用し、みな努力を重ねることによって日本語を習得していった。

4.2 「第二期 日本で働く」の結果と考察

	A	B	C	D
年齢と期間	23歳～26歳 (3年)	38歳～43歳 (5年)	28歳～40歳 (12年)	29歳～33歳 (4年)
日本で働いた 場所(職種)	沖縄県(ホテル業) 東京都(商社のパイ ヤー)	宮城県(ホテル業)	東京都(台湾のテレ ビ局のカメラマン/専 門技術職) 山梨県(ホテルのカメ ラマン)	沖縄県(レンタルカー /サービス業)
働き始めたきっ かけ(灰色:転 職した理由)	学校の先輩から学 校を通じて同級生4 名と一緒に卒業後 就職した。	10年働いていた台 北の日本専門旅行 会社を通じて知り合 った日本人のホテル	会話に突然日本へ の転勤を命じられた ため。(台湾のテレビ 局が日本からの特派	ワーキングホリデーで 働いていた会社で、 正規雇用となったた め。

	(沖縄の離島だったため、田舎の生活に飽きてきたときに、首都圏にある会社の社長からスカウトを受けた。)	マネージャーからのヘッドハンティングされたため。	員の撤退を決めたため。)	
日本で経験した 困難やカルチャーギャップ	・スーパーすらない離島での生活が途中から苦しくなった。	・当時は外国人の労働者は少なく、町で唯一の外国人だった。	・最初は、食券さえ変えないほど、日本語ができなかった。	・社長にかわいがってもらって、最終的に副社長までなったが、いわゆるブラック企業で毎日12時間労働で、週一回しか休みがないのが辛かった。
	・日本人はキャリアをつけるために一生懸命頑張っているというイメージがあったが、ホテルの同僚はそうでもなかった。	・台湾では、一人で三人分の仕事だから、給料が高かったが、日本の仕事は、仕事が担当制で給料は高くなかった。	・ゴミ捨てなどのルールが複雑だった。	・嫌な上司が入ってきて、いつも怒られて、その怒りを自分も部下に転嫁させていたのに、気づいてから怒るのをやめた。
	・失敗してしまったときに、恥ずかしかったので笑いながら謝ったら、お客からよけいに怒られた。	・お客は外国人なので、交渉の仕方などわかるが、それを日本側が対応してくれなかったり、理解してくれなかったりした。	・取材の申し込みをする手続きが複雑なうえに、なかなか許可がおりない。	・お客に「日本人を出せ」と怒鳴られたり、いやなことはたくさんあった。
	・会社に長くいる人のやり方で仕事をしなくてはならなかった。	・セクハラされても何も言わない日本人が理解できなかった。	・日本人の考え方はまっすぐだが、少し頭が固い。担当以外のことをしてくれない。	
	・日本人とコミュニケーションをしたときに、自分が伝えたいことが伝わらないで、喧嘩になってしまった。	・飲み会と仕事場のギャップ、仕事とプライベートで態度をわける日本人にびっくりした。	・日本人と会議に出たときに、あるプロジェクトと一緒に準備をしていたが、自分が属する台湾の会社側が丁寧に対応してくれず、仲介として辛かった。	
			・仕事が急に出てくるので、プライベートでドタキャンしなくてはいけないうえに、多くて辛かった。	

- 必須の通過点として、全員前向きに仕事へ取り組んだ。
- 必須の通過点として、全員日本の生活や仕事に比較的早く馴染んだ。
- 必須の通過点として、全員日本で困難に遭遇した。しかし、分岐点として、それを乗り越えられなかった人はいなかった。
- 被験者は、前向きに仕事に取り組み、その場にすぐに溶け込めるコミュニケーション能力があり、困難を困難とも思わず乗り越えられる精神的な強さがあった。

4.3 「第三期帰国を考え始める」からの4名の経路と考察

必須の通過点として、家族や恋人などの問題から台湾への帰国を考え始めた。社会の状況も含めて、帰国を考えたのは被験者Cしかいなかった。

被験者は、日本で働くことに強い意志を持って臨み、台湾へ帰ると決めた際に、社会的な要因にあまり左右されていなかった。

被験者の大部分は、家族や恋人のことで帰国を決意する「家族思いな台湾人」の一面が見られた。

4.4 「第四期帰国後」からの4名の経路と結果

分岐点として、現在でも日本語を使って仕事をしている人とそうでない人がいた。

必須の通過点として、日本で働いた経験が全員の自信や自己効力感につながっていた。

日本で働くということは、大変なことや辛いことがたくさんあるが、最終的には達成感となって、全員の自信につながっていた。

2. 考察

被験者の語学力は日本で働く前からある程度高かったが、実際に働くと日本語能力の問題でも困難に遭遇していた。しかしながら、常に努力を重ねることで、言葉の壁を乗り越えている。また、苦勞し

て得た「高い日本語能力」がその後のキャリアを支えている被験者もいた。

被験者は、仕事場では想定していた以上に、前向きでコミュニケーション能力に優れ、困難を困難とも思わず、乗り越える精神的強さがあった。仕事上の理由だけで、困難を乗り越えられずに台湾へ帰ろうと決めた人はいなかった。

被験者は、日本で働くことに強い意志を持って臨み、台湾への帰国の決断は、家族や恋人のことが主な要因であり、「家族思いな台湾人」の一面が見られた。

日本で働くことは、否定的なことよりも、最終的には達成感となって、被験者の自信に繋がっていることがわかった。卒業後の学生たちの成長を促し、キャリアを形成するために、日本で働くことを一つの選択肢として、勧められると考えられる。また、それは外国人労働者を増やしたい日本政府の方針にも合致するため、COVID-19終息後も引き続き日本で働く台湾人が増え続けることが予測できる。

3. 今後の課題

被験者たちが、多くの困難に遭遇し、挫折しそうになったり、それを克服するためのドラスチックな変容を想定していたが、被験者たちは「郷に入ったら郷に従え」という考えで、淡々と困難を乗り越えていたため、複線経路が作るのが難しかった。乗り越えていった過程を掘り下げる必要性があるかもしれない。

バックグラウンドや経験の異なる被験者4名にインタビューをしたが、共通点が多く経路が似ていた。TEAの特徴を生かすためにも今後は被験者の条件を変えたり、人数を増やしたり、等至点などの見直しなどが必要となるだろう。

内山喜代成(2018)「台湾における成人日本語学習者の学習継続プロセス—教室への参加及び参加継続の促進・阻害要因の分析—」『日

本語教育 171 号』

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015) 『TEA 理論
編 複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015) 『TEA 実践
編 複線経路等至性アプローチを活用する』新曜社

サトウタツヤ(2009) 『TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを
扱う研究をめざして—』誠信書房

柴田あづさ(2018) 「日本語学習における関西弁創作の教育効果—複
線経路・等至性モデリング分析から見る留学生 4 名の変容過程から
—」『日本語教育 170 号』

武内珠美・小坂真利子(2010) 「デート DV 被害女性とその関係から
抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究—複線経路・等至
性モデル(TEM)を用いて—」『大分大学教育福祉科学研究紀要』

厚生労働省「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和元年 10 月
末現在）

最終閲覧日：2020/09/26

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09109.html

TEA 研究会 最終閲覧日：2020/09/26

<https://sites.google.com/site/kokorotem/home?authuser=0>